地域に根ざして世界をみつめる研究をめざして

高 橋 啓 一*

Museum Research: From Regional to Global

Keiichi TAKAHASHI*

I. はじめに

著者の勤務する琵琶湖博物館は、1996年4月に設置され、その年の10月から開館した県立県営の総合博物館である。最初の学芸員を採用してから7年、博物館をつくる方針が決定されてからは約10年の歳月をかけてつくった博物館である。その博物館づくりの特色は、なるべく早い時期に学芸員を多く採用し、また館長候補も決定し、事務職や業者が中心になってつくるのではなく学芸員に展示や運営の計画を考えさせたことにある。また、建物の設計より展示の設計を先行して行ない、建物が展示の意図を十分反映できるように配慮された点も特色のひとつである。

開館1年目は、120万人以上の来館者が訪れ大変な賑わいをみせた。来館者にとって琵琶湖博物館は、従来の博物館にない楽しさをもっているらしい。ここでは、その展示や博物館運営の根幹となっている研究・調査活動について概説し、日本の博物館のひとつの研究方向の例として琵琶湖博物館のめざす研究を紹介する。

II. 琵琶湖博物館の基本方針

研究・調査活動について述べる前に、琵琶湖博物館のすべて活動の前提となっている博物館の基本方針について述べる。研究・調査活動もこの基本方針に基づいて行なわれている。基本方針は、『要覧』（滋賀県立琵琶湖博物館、1996）に次のように3つにまとめられている（図1参照）。

1) テーマをもった博物館

・「湖と人間」というテーマにそって、未知の世界を研究し、成長・発展する博物館

琵琶湖は、自然環境がゆたかであるばかりでなく、人とのかかわりが深い湖であり、琵琶湖に接近することは、とりもなおさず、人と自然のかかわりについて考えることになり、文字通りの総合性が必要とされる。

このため、琵琶湖博物館では、「湖と人間」というテーマにそって、博物館が本来もっている研究・調査機能を柱として、自然と人の両面から、琵琶湖とその他の湖沼についての知識・情報を集積し、それらが展示や交流活動に反映できるような博物館をめざす。

このような、総合性を保つことで、訪れるたびに新たな発見ができ、くりかえし訪れたくなるような動きと楽しみのある博物館の基礎的な活動が保証される。

国際的にも価値の高い琵琶湖にかかわる研究調査を基礎に、地球規模での環境や生物多様性の保全、さらには、文化の固有性を理解するための研究を充実させ、湖沼をテーマにした学術研究の面においても国際的に重要な役割を演じることが期待できる。

県立博物館というと規模が大きくなり、県内の事柄を総合的に扱うことに終始し、明確なテーマのみられない博物館も多いようにみられる。このような中で、幸いにも滋賀県には大変多様な魅力をもつ琵琶湖というものが存在し、それを通して地球規模あるいは普遍的なテーマを考えることが

* 滋賀県立琵琶湖博物館研究部集水域研究系

* Lake Biwa Museum, Catchment Area Research Section

図 1 博物館の活動のイメージ。

可能となった。

2) フィールドへの誘いとなる博物館

・魅力ある地域への入口として、フィールドへの誘いの場となる博物館

琵琶湖とその集水域は、長い時間的経緯のなかで、自然の生態系、自然と人との葛藤の歴史をつつみこんだ場であり、目にみえる具体的な事物の背景に、目にみえない未知のかかわり方がかくされている豊かなフィールドである。琵琶湖博物館では、「魅力的な発見や創造は、現場のフィールドから生まれる」という理念のもと、地域での研究活動や交流活動の入口となるような各種のプログラムを企画し、実践できる場とする。

このような働きかけの中で、人びとの関心が自己の生活の場や地域にむかうきっかけとなるような博物館をめざす。

また、日本の湖沼をはじめ、アジア地域、世界各地の湖沼地域にも魅力に富むフィールドがあり、それらのフィールドとの比較研究により、琵琶湖の価値や意味、さらには人間の湖とのつきあい方も理解されるであろう。

このような観点から、我々は展示をつくる際にも、すべてを展示で語りつくすことをせずに（そのようなことは到底できないのであるが）、フィールドや身近な生活の場へ来館者の目を向けさせ、そこに誘うことを最重要課題とした。このことが琵琶湖博物館の展示を、従来の博物館の様に暗い室内にケースが並び、整然と並んだ展示物や解説を来館者が静かに見るのとは、全く逆の様相を呈する博物館にさせた。

3) 交流の場としての博物館

・多くの人びとによる幅広い活用と交流を大切にする博物館

琵琶湖博物館は、展示物を見学するためだけの施設ではない。一般の人たちはもちろん、専門家をもふくめて、あらゆる人びとが展示や交流・サービス活動、研究・調査活動などの博物館活動にかかわり、楽しみながら学び考え、出会いの場となるような、またそのことが博物館の成長、発展につながるような、人、物、情報が交流する場をめざす。

とくに、生涯にわたる自己学習により各個人の創造性をはぐくみ、生きる力を養うことが強

くもとめられる現代社会において、未知の人びと、未知の知識との出会いをはぐくみ、新しい価値を創造していく場として、まさに博物館は、幼年から年輩の人たちまで、多様な人たちがかわる場とする。

来館者における交流の一番の担い手は、展示交流員と呼ばれる人たちである。彼らは博物館全体では30名おり、展示室や券売の18のポストに常時勤務している。他館の解説員と異なるところは、その仕事は解説をすることではなくまさに交流することにある。解説は一方的な流れであるが、交流は双方向的である。展示交流員は、解説はもちろん行なうが、来館者の感想や情報を受け取ることに、より力をいれているのである。この話は今回の内容とは少し外れてしまうので、ここではこれ以上しない。

次に、本題である琵琶湖博物館の研究・調査活動が、以上に述べた博物館の基本方針のもとにどのように行なわれているのかについて述べる。

III. 琵琶湖博物館の研究・調査活動方針

琵琶湖博物館は、博物館活動を推進するための組織として、総務部、事業部、研究部を置いている。学芸員は現在31名おり、研究部に席を置き事業部の仕事を兼務するのが組織上の特徴である。研究と事業をどちらか一方しかやらない学芸員は、琵琶湖博物館には存在しない。

ここで話す研究・調査活動は、基本構想以来、博物館の活動の中では常に重要視されてきた。要覧の中の博物館の「活動方針」の第1番目にあげられていることにその姿勢が示されている。

研究部の位置づけについては、1996年度につくられた運営計画の調査・研究機能についての項を見ると、次のように書かれている。

博物館活動をたえず成長・発展させるためには、日常のたえまない研究・調査活動は欠くことができない。博物館活動を樹木にたとえると、研究・調査活動は、大地に深く食い込み、“知”という水分と栄養分を汲み上げる根である。長期的、巨視的な視野に基づく基礎研究のほか、社会の要請に基づく課題追求型研究も必要であ

る。

さらに、博物館の交流活動、情報システム開発、収蔵保存手法の開発など、応用的な研究分野も必要である。

そのような研究能力をもったスタッフを配置し、その研究成果をもとに展示や交流・サービス活動など、日常の博物館活動の充実をめざす。また、人びととともに歩む博物館として、研究・調査活動に広く地域の人たちがかわるような研究体制づくりをめざす。

さらに、琵琶湖周辺に立地する研究機関や大学などと相互に研究協力体制を組むことはもちろん、将来的には世界各地の湖沼研究にかかわる研究機関とネットワークをくみながら、長期的、総合的視野で横断的な研究を企画、立案、実践できるような体制づくりをめざす。

(滋賀県立琵琶湖博物館、1997)

この基本方針のもとに、総合研究、共同研究、専門研究という3つのカテゴリーがつくられ研究が行なわれている。それぞれについて以下に概要を説明する。

1) 総合研究

総合研究とは、琵琶湖博物館の基本テーマ「湖と人間」にかかわって行なわれる研究で、多分野にまたがるテーマを総合的にコーディネートして外部の研究者とも協力してまとめていき、概ねひとつのテーマについては4～5年の期間をかけて行なわれる。その成果は企画展に活かすと同時に、研究報告書や学会に公表する。現在行なっているテーマは、以下の4つである。

- ・水田生態系と人間活動に関する総合研究
- ・琵琶湖沿岸帯生態系の構造と動態に関する研究
- ・東アジアの中の琵琶湖、その成立と人間生態系に関する総合研究
- ・博物館資料の整理・保管と利用に関する研究

2) 共同研究

総合研究よりも特定のテーマにしばった研究で、博物館の複数の学芸員あるいは外部の研究者と共同で行ない、その成果は企画展やその他の博物館活動に活かし、同時に学会に報告する。現在18のテーマで研究が進められている。

3) 専門研究

学芸員の専門的な資質を伸ばし、博物館活動に活かすための個人研究で、成果は博物館活動の中や学会などで公表する。学芸員一人が1テーマもっている。

以上のような体制のもとで、どのような特色をもった研究が行なわれているのかを次に述べる。

IV. 研究の特色

一般的に博物館における研究の特色は、学際的な研究ができる点にある。琵琶湖博物館のような総合博物館では様々な研究分野の研究者が集まっており、また個々の研究者が国内外の研究者や研究機関とネットワークをもっている。近年学界においても総合研究が活発に行なわれるようになり、異分野の研究者間での交流も増加してきた。しかし、ある程度の規模をもつ総合博物館では、日常的に異分野の研究者の知識や考え方の違いを体験することができる場所に特色がある。ちなみに琵琶湖博物館では、自然科学の研究者と社会科学の研究者が組んで研究することがふつうに行なわれている。

さらに博物館は、具体的な資料と情報が集積する場所であり、最新の情報をもとに研究できる可能性をもっている点で大学とは異なる。

このような中で、琵琶湖博物館の特色は研究テーマが琵琶湖地域に根ざしているところにある。したがって、学芸員は自ら琵琶湖地域を調査し、資料やデータを収集することになる。また、地域の人たちもそのようなテーマをもつ博物館だからこそ、知識や情報を進んで博物館に提供する。そこに両者の強い結びつきが生まれる。

このように地域にこだわるのが琵琶湖博物館の大きな特色であるが、地域にとどまらないのも特色である。「湖と人間」というテーマは、「湖と人間の共存」あるいは「自然と人間の共存」を問うているのであり、この問題は琵琶湖や滋賀県にとどまらず、広く人類共通の問題となる深さと広がりをもっているのである。また、琵琶湖あるいは琵琶湖地域というものが世界的な「古代湖」であり、その中でも最も人間とのかかわりが深い湖の

ひとつである。この地域には、地域を通してさらに広がる興味あるテーマが秘められている。

我々の研究・調査活動は、だれもが認めている魅力ある遠い地域にでかけていって調査することよりも、まず地域の中にある魅力あるテーマを掘り起こし、それを地域の人たちと明らかにすることにある。地域の中にも普遍的な興味あるテーマはたくさんあるのである。地域の人たちは知っている情報を提供し、学芸員は地域の人たちが気づかなかったそれらの価値やテーマを訓練されたグローバルな目で見つけだし、共に調べる。それが琵琶湖博物館のめざす研究の方向である。

V. 研究・調査例

次に、実際行なわれている研究の中から、著者がかかわっている足跡化石の研究例を紹介する。

滋賀県における足跡化石の研究は、1988年にはじまった。この年の9月に琵琶湖の東部、甲賀郡甲西町吉永を流れる野洲川河床の古琵琶湖層群から、膨大な量の長鼻類と偶蹄類の足跡化石が発見された。この調査は京都大学が中心となり、野洲川足跡化石調査団（団長、亀井節夫京都大学教授、当時）を結成し行ない、亀井ほか（1989）、田村（1991）、野洲川足跡化石調査団（1995）により報告された。

これ以来県内では、全国で発見されている足跡産地の半数ほどにのぼる約30箇所から足跡化石が発見されている（岡村ほか、1995）。古琵琶湖層群は約400万年前から約40万年前までの地層であるが、この地層のほぼ全層準から足跡化石が発見されている。このように同一地域から長い時代にわたって足跡化石が産出する場所は、他に例を見ない。足跡化石を調査することは、琵琶湖のおいたちの中で当時の動物相を明らかにしたり、その足跡のついた環境を考える上で大変重要である。

この地の利を活かして滋賀県足跡化石研究会が1990年に発足し、調査を重ねてきた。博物館の準備に学芸員が集まって来たのもこの時期からで、以後古琵琶湖層群の足跡調査を研究会の人たちと実施することは、地学系の調査活動の大きな柱と

なっている。全国で最も多く足跡化石が発見されるのは、この地域に長い時代にわたって足跡化石が残るような湖やそこに流れ込む河川周辺に湿地が広がっていたことに加えて、このような調査が10年近くも続けられたことにある。

足跡化石は、30個所のうち21個所（70％）が河床、9個所（30％）が工事現場や採土場の崖などから発見されている。

調査手順はこの10年の調査の繰り返しの中で確立され（岡村ほか，1997；Okamura *et al.*, contributed），図2のような流れで進められている。この際に重要視されることは、化石が発見された地域の自治体の関係部署、多くの場合は教育委員会であるが、ここに化石確認後にまず訪れることである。そこで化石の重要性と調査の必要性を十分に説明して、協力を得られるようにお願いする。できれば主体となって調査してもらうようにしている。このことは、現地の調査や発掘を進める上で地元の理解無しではできないことはもちろんであるが、地元の人々が自らの手で郷土のテーマを調査することの意義を考えているからである。その結果、文化財担当の技師のみが手伝いにくるような場合もあるが、地域の歴史研究会や住民などが大勢で発掘するような場合もある。また、県内の地学を研究している教員や同好会の人たちにも常に呼びかけ、広い意味で自分の郷土を探る活動と一緒に進めるようにしている。

また、発掘品は地元と琵琶湖博物館に保管するようにしている。従来しばしば、発掘された資料やデータは発掘者のもとに置かれたままになり、地元の人々の目に触れる機会が少なかったことがあった。幸いにして、足跡化石の場合には一度型どりをするところから複数個複製をつくることのできるもので両方で保管することが容易である。

発掘が一段落すると、可能な限り現地見学会をするようにしている。このような中で、地域の人たちの関心が高まり自分たちの住んでいる場所を改めて見直したりすることがある。また、次の調査のときには、容易に協力が得られたりする。

このように、足跡化石の調査においても単に琵琶湖地域の研究を進めるのではなく、地域の人た

図2 足跡化石の調査手順。
（Okamura *et al.* を改変）

ちが調査に参加したり、そこで研究者と対話したり、また発掘された化石を通して自分たちの郷土をみつめられるように進めている。

VI. 今後の課題

琵琶湖博物館の研究体制は、まだ完成されたとはいえない。今スタート台に立ったところである。山積みになった事業部の問題解決に追われて、研究部の仕事に十分に時間が取れないのが現状である。しかし、こういった中で、琵琶湖博物館の研究は準備室時代から行なわれ、多くの館外の人たちによって開館前後の多忙な時期にも進められてきた。地域に根ざしたテーマをグローバルな視点で見る。そこに地域の人々の細かいところまで知り

つくした目と研究者の他の地域で得た経験が協調しあい互いにより結果をもたらすのではないだろうか。

琵琶湖博物館には31名の学芸員がいるが、博物館の外にはこの何十倍もの学芸員がおり、一緒になって琵琶湖地域の調査を続けている。琵琶湖博物館が地域に根ざそうとするからこそ、このような協力が得られるのではないだろうか。ローカルなところをグローバルな目で探り、それをローカルな問題解決の視点とする、そんな研究をめざして琵琶湖博物館の研究は続けられている。

文 献

亀井節夫・石垣 忍・田村幹夫 (1989): 古琵琶湖層群の足跡化石, 科学, **59**, 320-323.
岡村喜明・田村幹夫・高橋啓一 (1995): 古琵琶湖層群

産足跡化石の概要. 琵琶湖博物館開設準備室研究調査報告, **3**, 135-199.

岡村喜明・高橋啓一・黒川 明・滋賀県足跡化石研究会 (1997): 古琵琶湖層群産足跡化石とその調査・研究法. 化石研究会会誌, **30**, 24-33.

Okamura, Y., Takahashi, K. and Shiga fossil-footprint Reserch Group (contributed): Community perticipation in the survey of the Kobiwako Group and the role of the Lake Biwa Museum. *Lakes and People*.

滋賀県立琵琶湖博物館 (1996): 要覧, 50p.

滋賀県立琵琶湖博物館 (1997): 琵琶湖博物館開館までのあゆみ, 254p.

田村幹夫 (1991): 古琵琶湖層群の哺乳動物足跡化石. 滋賀県自然誌, 627-644.

野洲川足跡化石調査団 (1995): 野洲川 (甲西町) の古琵琶湖層群産足跡化石. 琵琶湖博物館開設準備室研究調査報告, **3**, 1-134.

(1998年9月8日受付, 1998年10月19日受理)